

女性が「自立」するということ ライフストーリーから読み解く高学歴女性の適応のストラテジー

白水 繁彦*

Pursuing the way of self-reliance, a woman's case ~A study by using the theme life-story method~

Shigehiko Shiramizu, Ph. D.

I. 社会学的調査の方法としてのインタビュー法

本論は、ある高学歴女性の「生き方」を、インタビューを通して理解しようとするものである。学生をはじめ社会学や社会心理学の初学者の利用に供すべく、入門的かつ具体的な記述を心がけたい。先ず、ここで用いる方法であるインタビュー法について、若干解説しておく。社会学でインタビューという場合は、調査対象者（調査相手）に面接して聞き取りをすることによって研究データを得ることである。

インタビュー法には大きく分けて「量的調査」のためのインタビューと「質的調査」のためのインタビューがある。

I-1 量的調査

量的調査とは、「統計的分析を適用することを予定して統計的なデータを収集し分析すること」（盛山 2014:58）で、定量調査と呼ばれることもある。一般にアンケートと呼ばれる「質問紙」（調査票）を用いる「構造化インタビュー調査」（structured questionnaire survey）がその典型である。結果はパーセントなどの数字で表されることが多い。社会の大体の傾向などを知るには適した方法であるが、調査対象者の個性的側面は捨象せざるを得ない。

構造化インタビュー調査に用いられる構造化質問紙（structured questionnaire 構造的質問紙とも訳す）は、質問の文言から回答選択肢、さら

にその順番までがしっかりと定められている質問紙のことである。大量の調査対象者に全く同じ文言、同じ質問順でインタビューされることを前提としていることに留意したい。教室などで大勢に質問紙を配って一斉に記入してもらう授業アンケートなどの集団サーベイもこの構造化インタビュー調査の一種である。国勢調査は量的調査の典型であるが、インタビューが前提ではないので、構造化質問紙による「留め置き調査」ということができる。

なお、社会を量的に把握する方法として、ほかに「観察法」（非参与観察法）などがある。観察法とは、気象学などで用いられる定点観測の社会調査版と考えてよい。視覚や聴覚などの五感によって現象をカウントする方法である。たとえば女性のブーツの流行を調べる際に、駅前など街角に一定時間立って、何人中何人の女性がブーツを履いているか数えて割合を出すというやり方などである。地味な作業であるが、テーマによって技法を工夫すれば有用な調査法であり得るし、後述する質的調査と組み合わせれば個人や集団の理解がより多面的となる。

I-2 質的調査

質的調査とは、いわば量的調査と区別するために使われている、多様な調査法の総称といってよい（大谷他 2013:251）。質的調査は定性調査とも呼ばれ、調査結果の多くが数字ではなく

* 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授

「ことば」で表される。

質的調査の種類としては対象集団や個人と長期に接触して観察する「参与観察法」、公的または私的な記録を分析する「ドキュメント法」、写真・画像・動画等を分析する「ヴィジュアル調査法」、会話そのものを分析対象とする「会話分析」などに加え、構造化インタビュー調査以外の各種インタビュー調査法がある。

質的インタビュー調査の典型は質問紙を持参しないで手元にメモ程度だけでインタビューをする「ライフヒストリー法」や「ライフストーリー法」である。どちらも調査対象者（話者）個人の語り（口述）を主たる研究データとして収集するものであり、さらに、個人の記憶の早い時期までさかのぼって語ってもらうという手法においても変わりはない。したがって、そのどちらの語を用いるかは研究者個人の考え方によるところがある（亀崎 2010:11-23）。ただし、筆者はライフヒストリーという語は口述だけでなく日記やメモ、写真などさまざまな個人記録（personal documents）などを援用して個人史を再構築する場合に用い、ライフストーリーという語はもっぱら調査対象者の口述に頼る場合に用いる。ライフヒストリー法もライフストーリー法もできるだけ個人の人生の全体像に迫ることで、個人の行動や価値観をその淵源にまでさかのぼって理解したり、大状況の文化変動（たとえば新しい文化の普及）や社会問題に個人がどう対応したかについて知りたいときなどに用いられる方法である。

なお、質的インタビュー調査には質問紙を用いる方法もある。たとえば、「非構造化インタビュー調査」（non-structured questionnaire survey）や「半構造化インタビュー調査」（semi-structured questionnaire survey）である。非構造化インタビューは回答部分のほとんどが自由回答であり、いわば質問文だけが用意された質問紙と考えてよい。一方、半構造化インタ

ビューは社会的属性に類するような簡単な質問には選択肢を用意するが、意見や考えを訊く質問は自由回答（open-ended）にするなど、構造化インタビュー調査と非構造化インタビュー調査の中間のような方法である。したがって半（semi）という語が付いているわけである。半構造化インタビューも非構造化インタビューも複数の対象者に対し共通の質問をする必要があるときに用いる方法であり、両者とも質問の順序や言葉遣いは、調査者、調査対象者の都合に合わせて変えることができるのが特徴である。

I-3 ライフストーリー法とテーマストーリー法

ライフストーリー（ライフヒストリー）は「当人（話者本人）」が主役の調査である。できるだけ、本人の語る気持を尊重したいという意味で「話者主動型」の調査といえる。一方、構造化インタビュー調査はいわば調査者の都合に基づいて調査が進められるので「調査者主動型」の調査といえる。

話者主動といっても、インタビューは調査者と対象者のコミュニケーションであるから、対話的構築主義的アプローチ（桜井・小林 2005）を採ることになる。したがって、話しはじめはもちろん、話者の話が途切れた際の継穂^{つぎほ}など、調査者も対話者として一定の役割を果たす必要がある。なお、継穂はライフステージ（年代別の生活状況）を考慮しながら発するとよい。その目安は、本人の就学、就職、結婚、出産、子育て、退職などに関することや子どもの就学、就職、結婚などに関することである。

ところで、ライフストーリー法の難点は時間がかかることである。話者本人の幼少時の記憶から聴くことが多いので、たいていの場合膨大な時間がかかる。とくに話者が高齢の場合は大きな負担をかけてしまう。

そこで筆者が提唱するのがライフストーリー法の利点を活かしつつ時間の節約になるインタ

ビューの方法である「テーマストーリー法」である。より正確にはテーマ・ライフストーリー（theme life-story）法である（じつはライフストーリー法を用いたといいつつ実際はテーマストーリー法に依っている、いわば無自覚的テーマストーリー調査が世の中には少なくない）。ここでいうテーマとは調査者の研究主題もしくは研究関心のことである。つまり、調査者の側に話者から聞きたいテーマが比較的明確にある場合の研究法である。話者主動による語りを聴きつつ、調査者のテーマにかかわる点も語ってもらうというやり方である。この方法の限界は第一に調査対象者の人間像が概略的にでもわかっている必要がある点である。そうでなければ研究テーマにふさわしい対象者かどうか判断できないからである。第二に、ある程度テーマを決めて話を聴き始めても、話者がそのテーマよりさらに興味深い体験などをしているテーマを変更したほうがよいことが生じる点である。

この「テーマ変更」はしばしば起こることで、後述するM氏のインタビューの際にもそれが生じた。すなわちM氏と筆者はかつて同僚だったため、彼女についてある程度の予備知識があった。そのためG学部10周年にちなみ、学部創設の経緯をベテラン教授である彼女の目を通して語ってもらおうというのが当初筆者が抱いていたテーマであった。筆者はそのつもりでM氏に話を切り出したところ、「女でもいいっていわれてK大学に就職したのよ」という思いもかけぬことばが返ってきた。その言辞に強く惹かれるものがあつたので、彼女の就職にまつわる体験についていくつか質したところ、社会学的にきわめて貴重な体験の持ち主であることがわかった。そこで筆者は急きょテーマを変更し、高学歴女性と就職ということを意識しながら問を発した次第である。

以上のように、テーマストーリー法は多少の技術を要するところがある。初学者はライフヒ

ストーリー法でインタビューを実施したほうがよいだろう。すなわち、話者の幼少の頃の経験などから問を始め、以後ライフステージの各段階にまつわる話を聴く。その語りを通して個人がいかに関値観を形成し、大状況の文化変動や社会問題に対応していったかを理解するといったやり方である。

I-4 記述のしかた

なお、ライフストーリー法にしるテーマストーリー法にしる、話者の語りを記述する場合は、調査者の質問とそれへの話者の回答（語り）を「そのまま」書き写す「対話引用方式」と、調査者が話者の語りを大幅に編集しなおす「編集構成方式」がある。一般には対話引用方式を活かしつつ主題と関係ある部分とそうでない部分を選び分け、ある程度構成しなおす「対話・編集方式」が用いられることが多い。以下のM氏の事例研究はその対話・編集方式の事例である。編集構成方式の実例は白水（2015:44-59）、対話・編集方式の巧みな例は野入（2015:165-197）などを参照されたい。

II. テーマストーリー法でM氏の語りを聴く

II-1 研究目的

本研究の目的は、男女差別が「当然のこのように」存在していた男性優位社会の女性の適応のストラテジーを明らかにすることである。本稿はそのためのテーマストーリー法を用いた事例研究である。なお、適応のストラテジーとは個人が自らの準拠枠に基づいて構成する社会生活上の適応の方策のことである。一種の処世術である。準拠枠とは社会学の用語で、個人がものごとを判断したり行動したりする際の基準となる枠組みのことである（井上 1993:723）。枠組みをスタンス（視座）と言い換えてもよい。準拠枠を構成するのは知覚や情緒などさまざま

な心理作用であるが最も基本的な要件は個人の価値観である。

Ⅱ-2 「対話・編集方式」による調査結果の記述

話者M氏のプロフィール

M. N. 氏（以下M氏）は1943年4月、5人きょうだいの末子（唯一の女の子）として高知市に生まれる。1歳のころ、空襲を避ける意味もあり、父の実家があった高岡町（1959年土佐市に改称）に移る。その後も高岡で過ごし、地元の高岡高校から高知大学文理学部文学科英文専攻へ進む。その後都立大学（現在の首都大学東京）の大学院へ進学し博士課程在学中の1972年、都内のK大学外国語部に専任講師として採用される。K大学外国語部の英語担当として助教授、教授として過ごした後、2006年K大学の新学部創設にともない異動。2013年K大学を定年退職。M氏の父は戦前・戦後と教員生活をおくる。母も高岡に移る前、1944年まで教員だったが、その後、高岡にあった先祖の農地を管理して戦後を過ごす。

なお、このインタビューは2015年12日12時30分～17時10分、東京都世田谷区内で行われた。

略号：… は筆者、MはM氏。《 》は筆者による補記。
 < >は筆者による整理、解説、考察。

M氏の話を聴く

… 小さい頃はどんな少女でしたか？

M 本を読むのが大好きな少女だったと思います。小学校のときは伝記物をさかんに読みましたね。^{わたなべ さん}渡辺華山などを読んだ記憶があります。中学校に入ると公民館から小説なども借り出して読むようになりました。母の書棚にあった夏目漱石も読んだし、父の書棚に谷崎潤一郎が現代語訳した『源氏物語』があったので読みはじ

めた。そしたら父が気付いて「まだ早い」と言ったんですが読みましたね。いろいろオトナでなければわからない部分は飛ばして読んでいただろうと思いますが。とにかく本を読むのが好きで、おかげで、国語はあまり難しいと思わなくてすんだところはありますね。

… 後に英語の教授になられるわけですが英語に関心をもった経緯を教えてください。

M 父の親戚に東京高師《後の東京教育大学、現在の筑波大学》を出て高知に帰って来て高知大学で英語の非常勤講師をやっていた人が英語の塾もやっていました。そこに兄たちが通っていたので自分も、ということで小学校の5年生のころから週に1回通ったわけです。兄たちが英語を熱心にやっていたので自分も自然に興味をもってやるようになったと思います。とくに土佐中・土佐高《中高一貫の県下随一の進学校》へ通った上の兄が使っていた受験用の参考書などは、高岡高校に進学したすぐ上の兄も使い、それを自分も使うといった具合で、兄たちの後を付いて行っているという感じでした。

また、高校の英語の先生もたいへん熱心な人で、生徒たちに正確な発音を身につけさせようと、別のミッションスクールにいたネイティブの先生に音読してもらってオープンリールのテープレコーダーに録音してわたしたちに聞かせてくれましたね。

<M氏には4人の兄がいるが、長兄、次兄は年齢がかなり離れていて、M氏が小学生の頃はすでに社会人になっていた。下の二人の兄つまり3番目と4番目の兄は年齢に近いこともあり、さまざまな場面で彼女の準拠集団《ある個人の態度、信念、価値観などの形成に影響を与える集団や個人》となっていく。彼女が上の兄という場合は3番目の兄のことであり、すぐ上の兄と言う場合は4番目の兄のことである。

なお、英語教師が生徒たちにネイティブの発音を聴かせるために用意したテープレコーダーは当時きわめて高価で、さらに消耗品である記憶媒体のテープも高価であった。この教師がいかに教育熱心であったかが伺い知れる。M氏が高校に進学したころの日本は1960年の日米安保改定の前後で、学生や市民が政府の政策に対してデモや言論で激しく意思表示をする「政治の季節」であった。そうした流れのなかで公務員の勤務評定《いわゆる勤評：きんぴょう》をめぐって進歩的な公務員と文部省が激しく対立していた時代でもあった。当然、教員や校長のなかにも教育委員会と対立していた人びとが少なくない>

… 高校に入られてからは、どのような日々でしたか？

M 高校ではすぐ上の兄の友人がいた社会科学研究会（社研）というサークルに入会しました。活発な会員は3年生まで入れて20名ほどだったと思います。

その頃は高岡高校も含め、多くの公立学校が勤務評定で大きく揺れ動いていました。1年生の時の2学期は授業がなかったくらいです。勤務評定を出さない5人の県立高校長が懲戒処分され、高岡高校の校長先生もその一人でした。校長支援のために生徒会で授業ボイコットを決定し、処分撤回の抗議行動をしました。私も高知県生徒会連合の一員として県議会の傍聴に行ったり、教育委員会への抗議に行ったりしました。私たちの高校の活動を監視するため私服警官が学校近くをうろついていたこともあります。そのほか社研の活動としては、原水爆禁止運動に参加したりしました。当時はソ連やフランスが水爆実験を繰り返したりしていたので、公民館長に付いて広島の前水禁大会へ行ったこともあります。広島に行った1年生は私を入れて3人だったと思います。

<今日の学生がこうした話を聞くと、とても過激な高校生だな、と思うかもしれないが、この時代は日本中が「政治の季節」のなかにあって、大学生はもちろん、比較的早熟な高校生も抗議行動に参加することも少なくなかった。その早熟な高校生の一人であったM氏の両親は彼女の行動をどうみていただろうか。次にその点を質してみたい>

… Mさんの社会的な活動にはお兄さんやそのお友だちの影響もありそうですが、御両親はどのようなかただったのですか？

M 父は1908年の生まれで、戦後若くして、37か8の歳に、校長になっています。『世界』を購読していたのを憶えています。父は師範学校《高知県師範学校、現在の高知大学教育学部》の卒業ですが、それこそ東京の高等師範に行きたかったようです。しかし、当時の農村不況のあおりで家業だった紙問屋《高知は和紙の一大産地。土佐紙として有名》などもうまうまなくなり、進学をあきらめたようです。母は戦後ずっと農業をやっていきまして、作物を育てることが好きだったようです。

<M氏の父が1908年生まれということは多感な年ごろに大正デモクラシーの薫陶を受けた可能性が高い。当時は軍事教練に反対する師範学校もあつたりして学園に自由な雰囲気があった時代である。その後、政府による思想統制が厳しくなり、特に1930年代に入ると思想弾圧が厳しさを増す。ともあれ、高校時代のM氏の社研での活動には、準拠集団たる兄やその友人たちの影響もあったと思われるが、戦後の進歩派に絶大な人気を誇った『世界』を購読するような父の影響も直接・間接にあつたかと思われる。少なくとも親は彼女の行動を強く反対しなかったようだ。それは、高知から広島までの、けっして安くはない交通費を出してくれたというこ

とからも推察することができる。教師だった母親が自ら熱心に農業に従事したということは注目すべきことである。高学歴女性が自分の仕事を持ち、その仕事を貫くという「自立した生き方」を身をもって示した母親はM氏にとって「ロールモデル」《個人の行動や考え方の模範となる人》として機能したと思われる＞

… ところで、お父様もお母様も教職にあったということですが、ほかに教師だった人が親族におられるのですか？

M そうですね。けっこういますね。たとえば、父のいとこ（従姉）にあたる女性で明治時代にすでに高等小学校や実践女学校で家庭科を教えていた人がいますし、その娘も先生ですし、ほかにもいますね。

＜明治期の農村で親戚のなかに女性で教師がいたというのは驚くべきことである。裁縫をはじめ家事を教える実科とはいえ教師をするからには少なくとも高等女学校は出ているはずで、当時の農村部としては極めて珍しい経歴である。とくに父の親族・姻族には教師が多く、その意味でも比較的教育熱心だったし、勉強することを大いに奨励する家系だったことがうかがい知れる。一番上の兄も教員になっている。＞

ただ、兄弟すべてが教師になったわけではなく、M氏のすぐ上の兄は神戸外大でロシア語を学び商社に勤め、その上の兄は大阪外大（現在の大阪大学外国語学部）で中国語を学び出版取次企業に勤めている。ともあれ、M氏の家庭環境は高等教育を受けることはいわば当然のことという雰囲気にはあったといえよう。こうした数世代にわたるM家の中等・高等教育の蓄積はM氏の「文化資本」の根幹のひとつとなっていると考えられる＞

… お兄さんたちが英語以外の外国語に進ま

れたのに、Mさんが大学で英語に進まれたのはなにか理由があったのですか？

M そうね、高知大学の英文科に進むと言った時、兄たちにいわれましたよ。「なんで英文なんかに行くんだ」ってね。実はドイツ語にも関心があったんですが、わざわざ英文にしたんです。将来を考えてね。というのは、何しろ私の頭のなかにあったのは将来必ず「自立する」ということ。将来の就職を考えたら英語を専攻しておいたほうが有利だと。

でも、結局、英文に進んでよかったのは、大学の1年生の時からたいへんよい先生に恵まれたこと。とくに旧制高校時代から教えていた先生がおられて、この先生の授業で英語学の面白さを知ることができたのです。

＜ところでM氏は化学が好きで、理系に進みたいという希望もあったという。物理も勉強を進めていた。「しかし、国立大学の理系の学部に行くには勤評の闘争で1年の2学期をやっていないので数学が間に合わなかったのね」。さらに、すぐ上の兄二人が家を出て大学に行っている（教育費が嵩む）という事情で必然的に家の近くの国立に行くという選択肢しかなかった。「当時は、国立大学は高校より学費が安かったのよね」。ともあれ、理系好きのM氏が英文専攻の「主流」である文学ではなく英語学という言語分析を専らとする学問に関心を持ったのも頷ける話である＞

… 就職のことはどう考えていました？

M 母は「教員免許は取っておいてね」といっていましたね。私も教育学部に教職の科目を履修しにいて、中学、高校の英語の教員免許は持っています。母は直接私に教員になれというようなことはいったことがないし、何にしても強制することはなく、自主性を尊重する人でしたね。

＜父も本人の決定を重んじる人だったという。当時の日本では「自主性」ということが進歩的教員の間で一種の流行でもあった。M氏の母親は教員への道を直接には主張することはなかったが、多少は望んでいたようである。M氏も間接的にはそれを知る機会があったという。M氏の母親に限らず、当時の日本では大学に進学した女子の親の多くが娘に教員免状の取得を希望していた。女子の大学進学率が非常に低かった当時《1960年代末でも女子は10%前後（内閣府統計）》、むしろ教員免状取得を条件に進学を許す親も少なくなかった。いざという時に教員になる道が開けるからである。当時、男女の給与格差がなく、キャリアウーマンとして生きていける数少ない職業のひとつが教職であったからだ。娘の生活の安定を願う親心といってよいだろう＞

… 教師になるという気はあったのですか？

M それがね、あまり先生になる気はなかったんです。末っ子だからか、ひとにやってもらうのには慣れていても自分から率先して指導するというようなことには向いていないような気がして。最近父親の遺品を整理していたら私の小学校時代の作文などを収納している箱が出てきた。その中にあった作文に、私は将来、研究職に就きたいみたいなことを書いているのね。翻訳と研究をしたいと。

＜もうそのころから学校教師以外の道を考えていたようだが、それにしても翻訳とか研究といったことを考えていたとは相当な早熟である。影響を与えたのは兄たちに付いて通った英語の塾の先生の可能性がある。高知大学の非常勤講師でもあったこの先生は結核療養を兼ねて故郷に帰って来ていたのだが早世してしまう。「先生が生きていたら英語の小説など原著で読む訓練などもしてくれたかもしれないのですがね」と

M氏はとても残念そうに語った。また、高校時代から英語の小説を読んでいた上の兄の影響も否定できない。いずれにせよ、小学生ですでに翻訳家や研究者にあこがれる少女であったことは、その後のM氏を想うと示唆的である＞

… 高校の先生になる道を選ばずに東京に行くことになりますね。

M 高知大学への集中講義に東大から来られた先生が英語学を教えられていてその影響もあったのね。それに、上の兄の土佐高校時代の友人で、都立大の聴講生から東大の大学院に進んだ人がいて、そうした話も聞いていたのでとても行きたくなったのです。

大学の卒論でもアイルランドを舞台にする現地語と英語との言語接触を扱っていた。考えてみると高校のころから、漠然とではあるけど社会言語学的な関心があったような気がします。大学でもアイルランドといってもイエイツ《アイルランドを代表する詩人、作家の一人》より言語接触のほうが興味があつたくらい。

… 東京に勉強に行く、と親御さんに切り出した時、どのような反応でした？

M 親には経済的に頼らない、自立すると決めていた。私は掃除がわりと好きなものだから「掃除婦でもなんでもして自分でやっていける」と父親に啖呵を切ったのね。そしたら父が怒りましてね。そんなことで多少は陰悪なムードになったけど、とにかく1年間行かせてくれたと頼み込んで、出てきたわけです。どうも、私は言いたいことをスパッと癖があったみたいね。大学の時の恩師にも、普段はおとなしいけど時々けっこうきついことをずばりということがある、と評されたことがあります。

結局母が仕送りをしてくれたし、兄たちも応援してくれた。たとえば、すでに就職していたすぐ上の兄はOED《オックスフォード英語辞

典。2万頁におよぶ最大最高の英語辞書》を買ってくれるなど、いろいろと援助してくれた。それでも生活は楽ではなく、奥沢のお金持ちの家に住み込みで娘さんの家庭教師をやったりしました。当時、部屋代と食費が浮くというのは大変助かることだったのね。

＜この日のM氏の語りのなかに「自立」という言葉が何度も出てきた。M氏のモットーの一つだったと考えられる。東京での生活は母親が陰ながら支援していることに注目したい。

ともあれ、都立大学大学院の聴講生生活は苦学しながらも好きな勉強に打ち込める日々だったという。あっという間に約束の1年が過ぎたが、勉強を続けたい気持ちが一層強くなった。修士課程に入りたいと思った彼女には選択肢として東大と都立大があった。高知大学時代に集中講義で来ていた教授（東大）は都立大にも非常勤で来ており、その縁で東大に行きたいという気持ちもあった。しかし都立にした。「とにかく都立（大学）の居心地がいいのね。聴講生に対して全く差別がなく、修士課程の学生と同じに接してくれたんです」。

… 修士課程を終えてからはどうしました？

M 修士論文完成間際にひどい蕁麻疹^{じんましん}が出て、提出に間に合わなかった。もともと干物にアレルギーがあったんだけど、住み込みの身としては好き嫌いが言えた義理ではないので無理して食べたのが当たったみたい。それに（修論の）ストレスもあったのかもしれない。それで修士課程は結局3年かかった。博士課程にすぐ進むという選択肢はあまり考えなかったですね。当時は、とくに語学教師としての就職は、修士課程を終えてから行くのがいわば普通でしたし。同級生だった男性も修士を終えてすぐに（国立の）S大学に行ったしね。私の指導教授はたいへん面倒見のいい先生で、いろいろと就

職先を探してくれた。でもやっぱり女性の就職先は見つからない。あとでわかったことだけど、求人側（大学）が男性しか採る気がなかったのね。掲示板に貼り出される求人の用紙には男子のみとは書いていないけど採用されるのは全部男性だった。

女子がなれるのはせいぜい非常勤講師くらい。そうこうするうちに、T女子大の短大へ英語の非常勤講師として行かないかという話がきた。産休を取っている先生の代講というわけ。週に3回、朝早くから通った。当時住んでいた碑文谷から井の頭線沿線の牟礼まで。

自分でも教えるのは向いていないと思っていたくらいだから、講師という仕事はけっこう大変だった。それでも世の中はおもしろいもので、T女大を辞めてずいぶん経ってから新幹線の車中で女性に声をかけられたんです。「学生時代に先生に教わりました。先生のことはとてもよく憶えています」っていわれたのね。

とにかく当時女性にはなかなか大学の専任の職は回ってこなかった。都立大も女性の助手を採らなかったのね。じゃあ、博士課程に行きながら専任を探るか、というような考えで博士課程に進学することにしたのね。博士課程にいる間に、K大学から専任講師の求人があった。私が28歳のときだったと思う。話を持ってきたのはK大学の学部（英文）を出て都立大の大学院（社会人類学）に行ったS先生。S先生は都立大の博士課程を終えて、その頃、K大学の文化学教室で教えておられた。先生を通して、K大学の外国語部が「都立の出身なら、女でもいいっていつてるよ」という話が舞い込んだ。ほんとうに運が良かったのね。S先生には足を向けて寝れないですよ。

＜「女でもいい」という言辞に筆者ははっとした。聞いた瞬間、時代を語る象徴的な言い方だと思った。先輩女性学者の苦労話を聞いたこ

とがあるからである。筆者の知人の女性は1960年代半ばに都内の国立女子大を卒業。新聞記者志望だったがどこも「女子は採らない」と断られ、「仕方がないので」アナウンサーになったという。ましてや大学院卒となれば、まず一般企業は採用してくれない。別の知人の女性は1960年代初め、東大の博士課程を修了後、都内のM大学にいた同じ専攻の先輩（男性）から専任講師として来ないかと誘われた。そこで書類を提出したのだが、M大学の採用人事がなかなか進まない。女性の専任教師採用に反対を唱える教授がいたからである。件の先輩は「彼女は女といっても男よりずっと男らしい人ですから」といって教授会を説得したという。当時、たとえ超難関大学を出ても、女子はキャリア職に就くのは難しかった。特に大手は女子には男性の補助的仕事しか与えないという企業が一般的だった。

そのような時代である。「女でもいいから」とK大学の外国語部から声がかかったM氏にも難関が待ち受けていた。やはり男性教授のなかにM氏が女性だということで難色を示す教授がいた。これについては外国語部の教授陣の頑張りで乗り越える。するとこんどは教務部長が面接をするという。教務部長までが採用面接をした、という話には学部自治という建前のなかで育ってきた筆者としては、少なからず驚いた。「どんなことを訊かれました？」「学生運動をどう思いますか、というような内容だったと思います」

当時K大学は学生運動の「反帝」の拠点のひとつだったこともあり大学側は神経質になっていたのかもしれない。

当時は都立大も助手問題に端を発した学生運動が盛んであった。とにかく1960年代末から70年代初頭にかけて学生運動が盛んでなかった大学のほうがむしろ少ないほどである。

高校生のころから社会意識の高いM氏がそう

した社会運動に無関心だとは考えにくい。そこで婉曲に次のような問をしてみた＞

… 都立大も学生や教授陣が随分元気なところでしたよね？

M そうですね。フランス文学の学生を中心に随分活発だったし、先生方も熱心に討論されていました。私などもみんなと一緒に（70年安保）条約反対でデモにも出かけたしね。

… 昔のことで憶えておられないかもしれませんが、K大学の教務部長の「学生運動をどう思いますか」という質問にどう答えたと、いま想像しますか？

M うーん、あまりよく憶えていないけど「難しい問題ですね」と答えたのではないかと思いますね。この件をよく憶えていないということは、それに対しては特段の追及はなかったのではないかしら。

＜やはり「70年安保」の際もM氏は当事者意識を大いに発揮していたようである。教務部長の質問に対し「難しい問題ですね」と答えたようだが、高学歴女性の就職難の時代に適応のストラテジーを洗練していった女性ならではの周到な回答であるといえよう。

… 「無事」K大学外国語部に専任講師で採用されたわけですが、1972年当時女性の専任教員はどれくらいいたんですか？

M フランス語に一人、ドイツ語に一人、スペイン語に一人、ほかに中国語の先生に女性がおられたけど、もしかしたら非常勤だったかもしれない。短大には数名おられたのを憶えていますね。他の法学部や経済学部などの社会科学の学部には女性はいなかったと思います。社会科学の学部で女性の専任教員が採用されるのは1980年前後になってからじゃなかったかしらね。

＜専任講師に採用されたM氏の当時のノルマは7.5コマ。これには英文学科の兼担の科目も含まれていたという。4年間で過ぎたところで専任教員の権利を行使して在外研究に出ることになった。しかし、給料が半分カットされた。いま思えば不当な話だが当時のK大学はそういうところだったのであろう。幸いなことにM氏の海外留学と前後して教職員組合も発足しており、さまざまな人びとの努力の結果、在外研究制度をはじめ研究環境が改善されるようになった。結局、M氏のカットされた給料は帰国後払い戻されたという。在外研究は1976年9月から77年8月までだった。その翌年、助教授に昇進する。教える科目は変わらず、一般教養の英語のほか経済学部で時事英語や英文学科兼担の卒論指導などを担当した。さまざまな点で後進的であったK大学にあってそれを改革すべく奮闘する人びとがいたことに留意したい。M氏もその一人であったと思われる。筆者の観察では、当時のM氏は、ひと倍正義感が強いという感じがした。その分、組合活動にも熱心であったように思う。彼女は高校時代の「社研」以来、不合理、不正義に対しては行動で示してきたように思える。インタビューを終わるにあたって、様々な学部で学生を見てきたM氏にG学部の学生の印象について質してみた＞

… 2006年の新学部（G学部）の発足で、外国語部から新学部に移動されます。そして2013年に退職されたわけですが、G学部にはどのような学生がいたという印象ですか？

M G学部の学生はとにかくバラエティに富んでいますね。さまざまな学生がいます。私は英語をいっしょに学んだわけですが、とても頑張った学生も少なくありません。たとえば北海道の付属高校から推薦で来た学生は、入った時は非常に低いスコアでしたが、まじめで吸収力もあった。彼は自分のスコアが低

いことをしっかりと認識し、それをいかに上げるかということを真剣に考えた。要するに自分の評価が客観的にできるかどうかですよ。着実に英語のレベルを上げた彼は卒業時にすぐに教職に就けるほどの力が付いていたのですが、さらにレベルを上げたいということで1年間オーストラリアに留学した。それから教員になったんですね。

＜G学部の教職課程（英語）の責任者を長く務めたM氏は、埼玉の県立高校の英語教師になった男子、千葉の中学校の専任教員になった女子、私立の高校の英語教師になった男子のことなど、多くの学生について、熱心に語ってくれた。特に群馬の小学校の教師になった学生については、「小学校でも英語が必修化されるので、彼には絶好の機会ですよ」。

M氏は教員採用の時の推薦状に売り込む文言のポイントとして、G学部卒の学生はプラクティカルな英語ができるだけでなく、コンピューター（メディア）が使えるし、その指導ができること、グローバルな視点からの幅広い分野の勉強をしているので視野が広いといったことを強調したという。「ちゃんと教職に就いてくれれば嬉しい。まず非常勤でもいいから教職に就き、採用試験を受けて正規採用されるよう自ら努めるように、と指導していました」。

… 最後に、われわれ教員がG学部の学生のために留意しなければならないことを御教示ください。

M インターディシプリーナリーな学部だから学生が自ら授業科目をインテグレートしなければならないということを、できるだけ早い時期に理解させる必要があるように思います。

たとえば埼玉の県立高校の教師になっているS君は一年生の時から教員になるという明確な目標があり、それに必要だと思う科目を中心に

履修していった。そういう目標をもっている学生には理想的な学部だと思います。

それに、想像力が大切だということを1年生に伝えたいですね。なにに興味があるか、自分自身に問いかけてみる必要があると思います。そうすればきっとピンとくるものがあるはず。それが自分の探しているものにつながっているはずです。

G学部はインディヴィジュアルに動けるところがある。マスとして扱うのが日本の教育の一般的な姿で、人間を平均化したがる傾向にありますが、G学部は教師も学生もインディペンデントですね。とんがったり、生意気な感じの学生もいるけど、それもG学部の特長だと考えるとよいのではないのでしょうか。個と個の対応に長けた学生を育てるということではないかと思っています。

Ⅲ. 結語

筆者がM氏の口述を通して知りたかったのは彼女の適応のストラテジーである。具体的には、人生のそれぞれのステージでどのような「生き方」を学び、選択し、実践したか。人生の岐路における判断の基となった視座はどのように形成されたか、ということである。そうした問題意識のもとに既にその都度考察を試みたので、ここではライフストーリーと準拠枠形成の関係について理論的な枠組みを示したい。

筆者は先に、ライフストーリーを聞く際は人生のライフステージを考慮しながら継穂をすればよい、と述べた。この考え方の基本にあるのは「準拠枠」概念から筆者が着想した「準拠枠進化論」である。一生を生まれたムラやマチで過ごすことの多かった前近代の個人は生涯を親・兄弟・近隣といった基礎的集団（第一次集団）のなかで生きたといってよい。近代以降の個人も幼少期は第一次集団のなかで育ち、基本的な

文化を学ぶ。そこまでは前代と同じだが、近代においては、その後、目的的功能的集団（第二次集団）へと進むのが一般的である。すなわち、第一次集団のなかで準拠枠の原型のようなものを形成したあと、より広い社会に存在する第二次集団に所属することになる。このより広い社会で個人はそれに適応すべくさまざまな価値や行動様式からなる文化を学ぶ。内外からの情報や影響によって準拠枠も洗練の度を増す。小学校や中学校の学区に存在する集団は第一次集団の延長といえるが、高校入学あたりから属する集団の多くは第二次集団である。

個人が所属する第二次集団は高卒後の人生の段階に応じてさらに多様となり、大学など所属する集団によっては国域どころか世界とつながるネットワークを有する場合もある。そこで個人はさらに合理的な判断をすべく準拠枠をバージョンアップさせていく。判断の枠組みは人生の各段階で所属する集団やそれを取り囲む大状況から大きな影響を受けて変化発展するのである。これを筆者は「準拠枠進化論」と呼ぶ。

M氏はその口述のなかで、しばしば「自立」ということを口にした。第二次大戦敗戦後、日本は民主主義を高らかに謳いあげ「男女同権、男女平等」という旗印のもと再出発した。M氏の幼少時、家族親族といった第一次集団のなかでは、そうした民主主義の普及促進者たる父をはじめ多くの教育者のいるリベラルで知的な雰囲気満ちていた。父も母も自主性を重んじ、きょうだい男女隔てなく存分に勉強させたし、それに応えるだけの能力を持った少女だった。なにしろ読んだ伝記のなかで憶えているのが渡辺崋山というほどである。並大抵の少女ではない。教職にあった母は若くして農業に転じ、自ら農地経営を続けた。その自立した生き方はM氏の幼いころから脳裏に焼き付いたはずだ。彼女はしばしば「自立」という言葉を口にしたが、結婚しても自ら農業者を貫いた母が、少なくとも

そのロールモデルの一人であったと考えてよいだろう。

十代半ば、高校生になったM氏は第二次集団に入っていくことになる。地域を取り囲む大状況たる県域や国域が60年安保改定や勤務評定問題で大きく揺れ動き「政治の季節」にあった当時、身近な小状況たるM氏の高校はどのような状態にあったか。地方の小さな高校にも大風が吹き荒れていたのである。そのなかでM氏は「社研」という政治や社会に強い関心を持つ生徒たちが集う集団に身を投じることになる。後押ししたのはすぐ上の兄の友人である。進路選択をはじめ、人生の節目になるほどの重要な選択の際に、しばしば大きな影響を与えるのが兄たちであり、その友人たちである。彼らは明らかに彼女の準拠枠の形成に影響を与える準拠集団として作用したと考えられる。社研を中心とする高校での活動の中でM氏は不正義や不公正に対する鋭い感覚を研ぎすませていったはずである。のちに彼女は70年安保の際のデモ参加や就職してから組合活動などの社会活動に参加していくことになるが、その遠因はこの高校時代にあったといえるのではないか。

個人は意識的、無意識的に社会の中でさまざまな役割を果たす。M氏を原水爆禁止大会出席のため広島まで連れて行った公民館長はM氏らにとってオピニオン・リーダーだったと思われるし（白水 2011:94-105）、1年生で3人しか行かなかったことから、彼女らは公民館長のフォロワーであると同時に仲間内では原水禁大会参加という新しいアイディア（イノベーション）の先駆的採用者（innovators）であったと思われる（白水 2011:82-92）。

より上位の第二次集団である大学へ進んだ彼女はさらに大きな社会とつながる集団に属することになる。就職の際、ほかの外国語よりは有利ではないかという判断から英文専攻を選んだ彼女だが、そこでは東大や都立大で教える教

授が集中講義を担当していた。「自立した女性」を志向していたM氏に「専門職」の自立した女性として生きて行く」という新たな目標が芽生える。それをより明確にしたのが、最初は聴講生として、次いで正規の学生として学んだ大学院での生活である。日本という国域はおろか世界とつながるネットワークを有し、質の高い業績をあげる人びとと議論する日々のなかで彼女はその準拠枠をさらにバージョンアップし、知識人としての自負と自覚を強めて行く。そうした胸膨らむ理想的な世界に身を置いていた彼女にとって、住み込みで家庭教師をする現実などは苦勞のうちに入らなかったに違いない。

理想と現実の違いを厳しい形で示したのはなんといっても就職差別である。日本中の、意識の高い高学歴女性が味わった現実である。大学院生だったM氏の場合は同級生の男子は専任で大学に就職していくのに女子には専任の口がない。あったとしても非常勤だけという現実。そうした当時の日本の大学でK大学は彼女を採用した。K大学外国語部のスタッフやそれを直接間接に支援した人びとの奮闘があったからである。彼らはK大学における（そして多くの日本の大学のなかでも）女性専任教師採用というイノベーションの先駆的採用者、少なくとも初期採用者（early adopters）にあたるのではないか（白水 2011:82-92）。それを多とするM氏は「K大学が『女でもいいっていいよ』といわれて就職したのよ」と明るく笑う。

M氏は最後にまた、「自立して仕事を続けることを最優先しましたが、つくづく運がよかったと思っています」と語った。明るく謙虚な物腰に秘められた高い資質と堅固な思想。外柔にして内剛。ここに、男性中心社会のなかで慎重に構築された女性の適応のストラテジーの一端を見る思いがする。

謝辞：暮の忙しいなか、筆者のインタビューおよび文字化後の面倒な校正作業に快く応じてくださったM氏に対し心からの謝意を表します。

のための口述記録』中央公論新社。

盛山和夫（2014）「社会調査の方法をめぐる諸問題」社会調査協会編『社会調査事典』丸善出版、pp. 54-59。

<ウェブサイト>

内閣府男女共同参画局 （2015年12月15日閲覧）
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/gaiyou/html/honpen/b1_s07.html

引用文献および調査法の参考書（姓の五十音順）

- 安藤朋之（2009）『初めてでもできる社会調査・アンケート調査とデータ解析』日本評論社。
- 石川淳志他編（1998）『見えないものを見る力：社会調査という認識』八千代出版。
- 井上和子（1993）「準拠枠」森岡清美他編『新社会学辞典』有斐閣。
- 岩波書店編（1968）『近代日本総合年表』岩波書店。
- 大谷信介他編（2013）『新・質的調査へのアプローチ：論理と方法』ミネルヴァ書房。
- 亀崎美沙子（2010）「ライフヒストリーとライフストーリーの相違：桜井厚の議論を手がかりに」『東京家政大学博物館紀要』第15集、pp. 11-23。
- 桜井 厚（2002）『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房。
- 桜井 厚・小林多寿子編著（2005）『ライフストーリー・インタビュー ―質的研究入門―』せりか書房。
- 佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク』新曜社。
- 島崎哲彦編（2011）『社会調査の実際 第9版』学文社。
- 白水繁彦（2011）『イノベーション社会学』御茶の水書房。
- 白水繁彦（2015）「自分たちの表しかた」白水繁彦編『ハワイにおけるアイデンティティ表象』御茶の水書房。
- 谷 富夫他編（2009）『よくわかる質的社会調査技法編』ミネルヴァ書房。
- トーマス, W. I, F. ズナニエツキ（1983）『生活史の社会学：ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（桜井厚訳）御茶の水書房。
- 野入直美（2015）「ハワイにおけるアメラジアン戦略的自己表象」白水繁彦『ハワイにおけるアイデンティティ表象』御茶の水書房。
- 御厨 貴（2002）『オーラル・ヒストリー：現代史